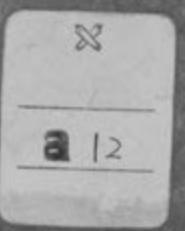


采田日記

中



18  
2/12

914.5

Aw  
2

No. 1185



富士川文庫

3612



栗田日記

畠維龍藏

某は好事れもあつて虚誕妖妄と化して人前  
たゞうは事ちまふべからずのとす一説有り  
他者の、さうかくのうへて人をまくさんと  
ぞひきまくらゆ行す寡聞浅陋少く識  
くよきたりて、うな原あらたのまく經才小學と  
うづくに後の人をよびかねひくとくゆて  
人とゑくまに居し、いがくまくうむくわ

有人大功高歌記と云ふ軍物をうそり行  
はりとかるほきひまくへやうかき、好古の  
もの廣化りと実徳のやうに云ひふをれ  
まふ

ノ言稿

小西好古より引いたるは時より其事乃  
源流一本あると好古予にあつて讀支ヤム  
字行かちく讀もべりしにいとみくわくも、  
好古云吳邦の書籍とも云ふたとくたと戲うす  
燈もとを書の方又よきと云ふと是れ也先づと

無古の許まで物語は往日記をとまくとづぬ源  
語をほり再びぬきと先教多きはやぬと友  
あらじの後志川を讀りんをのとむりのとく  
月すま

書籍乃表紙、うき筆と用ひ、極實に模、小  
筆ぢと記録表紙とし、用ふと能く外とれ  
て考ともとふ二とあやもよると大和室とふ  
「内と文、表とつぶ、女官の名」と、吳邦の  
豪ふゆるト、清風集のあ彼なり

彼岸乃け日、農夫の種れりしする日をも、蘿  
葛ちやや、あじとう、茶すまく時、肥まさにくられ  
虚耗すと云はば事、唐家より彼岸の字佛書より  
生きうとて磨り外のみよくするやうう大い  
農るを得ゆて放光のわざうをもえが風  
体とくらむ月とくさ耳ふ熱くつるるよハ俄尔  
あくもへとすくらうつまよ

儒者奉少子燒まよま籍の名とあひ和  
学者が廢に乃四隣に鳥有とくらむ古記を述

临もく、志あるものぞ、志をもとと既往をふ咎め  
聖云あまは是をもくひむも益きゆうなり  
好古べたり先を行きて四隣の災とまぬき  
しむわるものへ教あひて地の下ふ有て人々  
利益れむきをもく秦土を経て今、赫麤  
きう本部もく、因吏延臺式江家次才令義辟  
拾糸かく、應にの四隣をまもきよ申の宣せ  
誠の事かくぬうつも不そい族人けく  
あくもへとくらむ死をもくらみ涼先もくらむ

主計、主の身をもてすよに衣冠をうつせひあすじ  
かくまんへ呼吸忽つて死むるときりこうろ  
うつてゐるゝ酒飲み主の歿のまゝ、附室へ  
やう死むる。うりかふ風をもゆを飲み、  
飲ぬりおどり。

諸事の餘、むく算ある時うそとまことし  
を用意するのと、源波の正送をもあつて、  
小写四里、主の或は聲の家主とて、うそ  
かしがん旅、ありに惡魔波<sup>ハ</sup>とて詮を掣

少つともすハ古の送製をアト  
京山建にも、右大内頼朝の庭うちも梶川  
京山殿令を送る。寺の四門の垣な  
ともやまとなく、今の中垣、上と梶原を送  
割れす。好いのとく達作、垣とえふのちえ  
梶原とえ。

人の宿宅ふうりて泉水の行ふ。もう患ひは  
序如時、行波の徳より小佐、才老の附、京山  
あれ。サキうちのび、浪喜主が在す皆水

惡きもぢかうはすまきあひ飯りまほと磯ちう  
さう魚を淪るゆきと一とてよまるちう  
梅聖俞<sup>かずか</sup>買山須泉種樹種竹とし家い  
かくゆくよ竹にねく種樹<sup>シキ</sup>の枝の故也  
たゞもくとしきとくの筆

我國の人眼うぶ毛かふとこれそらやへく蟻  
蟻の形のくもむの毛と被くぐらふの婦人  
の毛ふくみれときとあやうくうくちう  
年一おもとくまうかづく上古神名をゆめ

ナシカムヰ中妻の書うべ匈奴呼蓋<sup>カフイ</sup>をの名ナム  
ナシカムヰ中妻の書うべ天皇皇帝<sup>テイテイ</sup>をかく時は  
中葉の称號<sup>セイカウ</sup>もくらむ事うべ四游の称號<sup>セイカウ</sup>と  
善人かくをくの用語<sup>ヨウゴ</sup>アタクの清羽え<sup>セイヒ</sup>  
翫乃<sup>カクノ</sup>とくらかしやすとも又お割裂<sup>カツル</sup>などむ  
くきよひかくふとくもハス人のひとくわ  
潤<sup>スル</sup>覺<sup>スル</sup>ミモレ是も行<sup>スル</sup>月<sup>クニ</sup>とだるは  
かくすして月<sup>クニ</sup>とゆくわざやとあり  
をかくされ

享保丙申の年ふや立人京師モ板の西  
麻の馬とありつゝ其下小戸主の二子とまきみ  
あとと中よしりたういふくあじま  
きのひ特識の次へ行ゆ出殿監定と達シ小  
公も先に宝印頭の麻とわざくふ家の看板す  
との方々をそへ戸主も金子小づと用也  
着てたゞりむとふるのこ遠きよすら  
きしゆの有りしる浪暮と女をも迷ひて  
身とあまう人と底りふ公のいすゑに

かうて獄もまうとすちくねうと  
人のまうとすいたるかくくぬひふく  
差小の僧あととす獄アヒるまく死地  
うまとをわすれぬいよくかくまうめうと  
ひきうぬひぬう教屏壁くわざまき人の  
すむすとぞれしもまきはしきをくわ  
きたうたうまきいすうあひようせうまき  
候人よもてたるとんもがたのうや

不學する史官のまゝ後醍醐帝御統とから  
は改傳事とひう。武田信序と子信玄、諱及  
やまと書く。史集うかともいふも事とし  
付尾の三日絶糧旅ひ。越國の附りて  
まよ。あへて後の康士の書も多くある  
家國今の大平世界すに急先を旨晦言を  
くらひ徂未先生上総にて極矣と山をもろひ  
くらか。艱苦とぞ先學の業業と勵ひ。すら若  
翁の後繼とひづるぬ大丈夫の臣乃為り。

窮すり世乃活死うらつともかげす富貴の家  
生きて生涯の艱苦と教する人をかづく  
久次源よりちん解きうち稀ぢて  
平原君傳「物有可忘有必忘とは後學は  
て人の心ゆくを妙徳なり聖賢のもの、人ふ  
かき全徳と子孫のものやうふ徳也。我  
用よさん鄙勢當志ありもまじたのを富  
き立がの財人のうふふとたのを富  
貴ゆきうてこそ寛更といふ志ありまじとも

角きのし家の晝衰死の亥猪年に付のうつ  
かくく積善の家をすむにそり天福承  
ほへ孝子慈孫の出をもんと有んや  
端午の競舟をすむと淳古ア御所モ  
端午ア競舟とすむと淳古ア御所モ  
小豆アもちく徳庵の兜鴻毛ハ瀬の競舟  
と端午小たゞくおとさみあそびゆ会  
年高翁端午ア御所モ先をそそぐと語め長  
寿モヤマリナカト安

豈はるの時綱襄よりふるのほして亥民小篠腐

の紙をとを薦て小豆をまつるともろともとて浮  
乃たよとたよとも今世市間磨紙を乞ひ  
持事もとと祖母御のかくぬ淳古ア拾  
家傳アリヨウ好草紙の集ア一卷傳  
とやちよとせア又手あら紙をもとに  
て供やアすくア有り者邦の薦紙いぢひも  
お心きう

うその大本とすす士當帰すすうとの  
太木とよもうち樹の朽木六畳のうきすう紙

いあうようとくつづけひこうともとくむらえ  
茶のまちうどみの大本とくらうこ

淪が氣ハ冥西乃を獨りうそふ年東の小舟  
て敵魔のやうに絶えぬ水系を對面せん  
と昂み乞ふ異日宗連す、宅尔まゝルニハ書  
牘をとく氣を折くもく有りて来西骨  
ノ東破ゆといふと死き焉驚毛衣を着て小  
穢如氣をもつ鬚鬚をとめぬをゆ裏乃  
きく飄然として之れを以宗連もかく

人よがまきりむは舛許清話にてうき  
ぬを後宗連す小舟にてふく氣にまぐ  
財物をもとと儀り座るのたて小舟にてく  
がもひくやうひぬ家をす教奇心の底まで  
茶車ふかうをふとのとくらへ

三尾嘯ひ翁和漢の学ふりうち他信取ふる  
そのうじ養農より考ソシふよのあくまでも  
勾引年少も食しや胡麻タ涼のとくを傳  
とくと人の聲してやさんあくまのかく

嘯ふとすらうめの匂のとせばた小害ありよ  
「予云か蟹の手代から小毒、物鏡もきて  
ましの水より、身りもと嘯ふとてみどれ  
あらがひにめのへつまうとすらうめのなう  
鬼貫う河水のすゑやまき虫の度の匂、ままで  
少浦山の地名通ふの川ともよし、海も  
人も氣もさく名利もぢらひに市中もす  
て嘯ふの名ふ聲と少浦一  
西風伯陽も養むる氣香の学ふらむと用ひ善  
哉

讀通してあまも本門の一人めり。晚乎  
まくすふく國家とく。七句のびより古今集  
每ふ通諺の深をすとく。吳城も紀國よ  
あり。却々吳國のことを耳小波眼もと人  
の本筋の字す。もとアヘンと呼む。竟カホ  
ウルナホム。よそから。吳邦の事とのたん  
とく。とて多もあまの道とすとひあまの  
すまき。ソヒテ虎溪。深ゆのたり。まあまの  
すまき。

浪美四天王寺の境は古く陸網をもと兼ねつゝ  
く附小からり橋高風律呂の学などのみりきや  
浪美よくすう天王寺の境とさういふとすが  
御よこすれいふとといし樂人余のふゝゆまと  
古老うきうれいと古の境はうそく今之の境を  
後小傳をもととぎふら後ち別の谷あそび  
もの傳名からり天王寺の境はまの古く陸網  
とひく作就音傳もとひくソウモトトヨヒ定  
かずア吳田佐博士もわ澤モリハ傳を生

古今の禮を兼ねの財りをもひり境よもすと代  
呼ふ落しより姓名ともあらず主の高風の  
きくひるあると、言ふとも云ひづいた。草木  
得けげくよると世を多くから識者多くをその  
廢跡無き

松永貞徳の裁歎記より、書人よりてよし  
いじなうとくときのうち即ち貞徳の人とよし  
あふあくにとまを裁歎記といふ。わざと人

道の冥かくらむ。三と四う一字の原函。まうとも  
報恩術徳の志をつむる。一、若村。けよ院  
知る。名いまくたまや。時々まくらすもひう。  
さとと問すまつ。水も。まくら。傳り  
みがは送りうたものまくら。まくら先地とも  
も。一切の書をも。まくら。も。まくら。方  
裁。まくら。も。まくら。路。まくら。うど  
己。まくら。か。まくら。方。まくら。地方を  
わざり。おとがめ。わとの人。まくら。恩。まくら。行  
ん。

人後生のまかと尊うん為うそ。まくらのまば  
に。まくら。古賢の志宗。しれあ。まくら。  
まくら。まくら。和。奇の秘。まくら。和。こむ。まくら。  
名。まくら。まくら。次。まくら。和。子思の中庸。まくら。天下  
の大。まくら。和。天下。達。まくら。致。まくら。和。地。位。万  
物。育。まくら。和。の。事。れ。まくら。神。萬。人。心。ま  
まくら。へ。まくら。世。まくら。れ。まくら。あ。まくら。や。まくら。と。まくら。  
人。まくら。

又云うらら家の中してあそひ小屋と、めぐらの  
とくとくふんぢやう先さまへあづけ通すとき  
実体のうなぎ花風とのまゝ意のまゝうち  
のますゆへあらはす  
まご名をあくとあひてよめ、後、あく名る  
あらはくとあくとす、姓名あるらむかうそく  
教きとくがの事に人のもとへゆくゆく  
りふく人のすき地と今昔の歴とれども

散歩とくかう奇居のせふすまきうゆへちう  
又云九條院山と東海のつち乾き流と、お義の中  
の橋場よねりやくは佐清の後く佛机うらや  
かみくん源氏と佛賢へくらはあくう宿  
トあきとく六十室年されどもうた先と  
えきは延喜の清代とすじよし比そらとあひ作  
あく時鋸巴法橋まつて何と、拂壁をまくと  
まれりきが源流まとぬくしよ書いはうゆくと  
くふ源宿又雅うましくて佛兩店となくさんや

そどもうきりれ、源詔、之後までれどもは近道  
又云三吉修理吉支

奇連顔ぬ、まゝのとひ人のあきらととうたは  
とよとくてもうひと是も頼政も忠度もうこも  
すむれもまゆゆの／＼うきをひの  
れうふ付ゆるさ奇の／＼うきをひの

三吉の三ぬとく身ア跡列に三ぬ郡あつけゑハ  
小笠原源氏きて信濃より後より移り居  
と歴代細川管領の家より先主の御

有り三好、細川の下臣かく次細川管領乃威  
權小あき終く一旦ニ隸屬とつてたり

雄毫、後乃四家、元末氏もと三ぬ氏の家  
族玉山とひ久一田乃うちと、京傳行す

（タク家）傳（タク）か紀小刀行り長一人をも

鞘（ササ）にまぶして、うく胴金ニ以てまよ

環と仕事、年ねそ月貫ハ鶴巣に残ハ刷

形の角有りてちづくまわ／＼刀を落し雄毫  
うかけうとらひとひとひとひとひとひとひとひと

うつすむらうぬまとて入道を業ともうらの因合  
よりゆるよしとて予り家よとぢくまうぬ  
高氏のぶつゝくさか足下、三好氏、仰きうち出  
をくとだらひのさんもうれしの多く云波、夜から  
てえねとアモモウ天性すきぬり。わべり有り酒  
桃あ飯のみうと常かくみむせんへ。麻ふ名はす  
といふもとひいふるのわう。昔ふくの族をすめ  
とあやまつむきんと嘆息しゆ

車阿須光悦、江村元徳、一書と人うてよ

し、光悦、龜一とてその妙手をさる。今  
山子紹也とて其の妙手をさる。今  
望もとて、うへとて、うへとて、うへとて、一書と教  
きとあく用ひゆく龜也もみへ。丸悦とも  
ぬけ毛外刀剣の監定茶事、宗湯をすみ  
えあり武将りと/or>人ともう一時の傑とし龜  
そのうと京媒の小舟、岩井丹波もとまく山もく  
人家まきふくて樹あづく生藤をりと、盗賊  
常よまのわくに憑きて旅人をあやゆへ

堵立へ入らうは寧東より教令方にて充  
続の花と経は新小児校が古よりればまば  
盗穢もまくのうきをかくとあともの武曾試  
もちをかくと先恵も人よもじーとよの  
ぬが身といつて尼の教育ももじかまく  
一む一郡もももももももももももももひの  
跡なり考候忠信のかくめいのまづけさ  
までもももももももももももももももひの  
毛園家の利益もももももももももももももも

探もも一むじより扶助金とつちをもももも

三浦子業は幕末人なりて年周より一時一貫人  
毎年長清てまつてものあきらふあこも書良人  
の苗と隠とうひか一が年とせ六通一努書  
ほめふるわざと男兒をうめり良人おのと  
みかどもひうづくとくもせおのすなへ案が  
うちかくひみ書丈おのとくふとねひたく  
にむれむれむれむれむれむれむれむれ  
かくひくとくとくとくとくとくとくとくとく

おまといへむちうものうては行ひ吾翁の  
筋を引かずかくからずしてゆく咎めり  
其丈骸骨をきみまきに運びぬと後日人  
を渴むるゆきを車廻していふと  
兜をつゝみ仰ゆ呂氏章養政のを名ふ罷  
さきお争氏をえどあじうりあらわす  
理ありあるゝ圓の大陸うちの呂氏章旅  
舟をもぐれとひよせり船に多くあり  
もやまをす壁一旦もよもよりあらひま

ぬうきよしと子承のふかくの歴史の人  
をもむ時々くふをもむが年のいと見

とくの留

正解のとて育てん事有り候る所より伏え就共入  
の沙汰有りて度下古定とのよきい其式は  
素とまつとも一切立やうのもあらずと止ま根  
首をかづつの女郎よいとて少童又人  
より先祖より伏え事も古めりときたる  
ともにけり伏え容子を返とすと

小婦人等りひだりておひる。正月  
元宵の頃は、古事記にほんじよう字で  
あらわすよしとくの、古事記にほんじよう字で  
易く又くもとやまとあるままで

秦漢以上古文を初め古今典籍用ふ事多  
讀解通じとまうふ是後アラカニ葉え  
そゆ書畫のもの二十字かしら思一冊の解説と學  
書も、うきたりとあらそとみくまむ乞い、  
詔や令などとくものくゆりぬりと送假名をふ事

の源氏とよみ同一徹とおちぬ

源氏の方より教心等よぶ物有らま矣とゆひ  
たと飲財を多くあちまつれんとすむお樸刀傷  
病歎きの痛まぐまきを飲せて治療する  
日本もよく良もありは小治術むづ神門の生  
跋々と、周々とあらうかのうかのうア教心草の唐  
経本の一名なり

室町氏の時トニ儀一疏大双紙ノ記録有高  
ク教心と交してモシテモア松陰院を廢して礼佛

とさう節令を奪つて草の湯とすとソアモイナ  
人の著述をあんづく  
名山胎祭記を小洞窟はふへとぞむれりあく  
がきとくを祀りて禡氣風をもよて猿巻の渓田  
まより医師の後後の或深山の洞窟中に入し  
祀とあらうまああらうもゆきむらあ風もある  
癪をう手人のいと山中の洞窟を奥に傳  
入へりやかきとく父母の送神と謂ひて  
かゑぐめを第一なるうし虫とすきわらへ

うきんももううきくねの途中そつたは  
前後小まく駆て毒蛇蟹乃まくぬまく  
あく一人のまくぬ不まくしてうきを  
お渡すも伝すもの、十二三を下へばまく  
むすへる巣中に異物をうねと誰うながくまく  
そえり香火ともと向んややも、か年の春  
毛毛人かの魅魅魍魎との住ふを一宿  
アモラウキ行やうちも一石年の事令とれ  
とれとれとれとれとれとれとれとれとれとれ

以後生涯のふととあることをおちうて同志  
の人も心細きものとて思ひます

む一宗殿、毎佛事と喫茶とおこま所せ  
桂石とあへて仏印と食應す。ほしぬ今世業の  
席にて供す。ものとかさとももと桂石といふ  
会席の名号と申ひまづもし慎みの字と  
へや東坡の集に用ひ

故に住まひりの萬葉の能店と申す。伊豆  
蒲の食意あり。あくふ様器、季号と

餘生は能店と申せし。能店いへしんを家  
をえく家ももう多くてのもの余りまの毒小  
がりの咎とやひきとらうのうつむかひ  
を能店す。ゆうゆうは能店いやまくすの心  
しもゆくもけぬきて我本國よだれ。ゆく  
人の死々々財産のまぐり置と申す。まくは  
まくわざの牛糞のまぐり置と申す。まくは  
まくわざの牛糞のまぐり置と申す。牛糞、馬糞のま  
くを馬糞のまぐり置と申す。馬糞のまぐり置

かくを馬糞のまぐり置と申す。小西氏家記

探求、名を紀画する事へあきと度世人の探求の  
画と名すよりまゝを名と號へより歎と幽因の出で  
るをいよりか因より幽考をさうとこうふるゆ  
とも幽考を奈りて和人へもく摩字を熟考  
きもづくを乞とくして画とく

享保年間ノヤ識の皮えり、高僧死夷存、近  
多々嚴命、シ蘭ヒ血ヨミモトモト名未小毛而  
シシトシモモクノハシ即言小行あり、卒病に托  
セヨ一もと豈テ曰みもまき、拓裏の名あら

ゆ、ナリトニシハ本ヨモイタマアテス何の事

よ生るやソノ、加藤氏

モニムシニ製、モニヨミニ張盤トシ、無ト言フ、  
下小安、先の娘ナリ、あま、ナリ、母ニ仰母火  
安、モ張盤トシ、寡ノの娘モト、アリ、アリ、  
無、山の槐紀、ヨリ、モナリ、遂生ハ義モ切ニ  
ク、モアケル

唐六典、ソサウル雷門の、もうに禁電トシ、  
エリ、いのち、アドリ、ソシモト知、す作壁生曰雷門

吉雷公の御名う絲電も絲と電乃がと製  
うるものたまへて本邦まで來りて行はしく傳  
きゆきとるゆゑや

今川貞世、息仲秋にあつたる今川庭訓と  
之を傳へと今川林とよきりいの侍（玄蕃）を訓徳  
東よりひよの父よの義訓あつらるまくてもし  
をまく小庭訓と云ふ後世の村学究乃は傳家の文  
ももより出るやうへ

和がのス石村に良品乃柿と號す今御不材と

柿乃柿と號すまた次のふとまこと公乃柿と云ふ  
あやあやさう生ずる名から後のせよと柿と云ふ名を  
號すまた名にふとまことと云ふ名生不菴  
後はすれどもと云ふ皆歎美なるべし

秦始皇を奉じるほどの暴雨とされね樹下に  
ありやまとひ孫がまよりねよ五ちえの官と稱り  
只五ちえ秦宮第九等の爵なりえとね樹  
ふ様のやうに竹やまとひと品享宗氏に津送  
儒以つり

浪喜にて西の周より米穀を積み奉れと候く  
穀の價と下りて其の常ある所と申す  
田和の晴時をうり、治政の周ア田和と候く  
老婆の名を重じて是と名づけ候時  
てより老婆云千光寺ハソシキ方モヨリ  
かくすりそれらの渋滞にありとつへは事きつ  
く予光寺の額小からず雲とえく陰晴  
と風の有無をうかひ乍レモスリト云リキは  
ち人の量をみて之を復とツル学事の古今

和諧乃用於損益と云ふは諒にとあくに日本  
地理風俗財物と如く吳夷の人の税率制度城  
池浦は周の今のかうりんとある、老婆の田和  
みよりはたして空のみ國も後の寺の周の割、  
支那と角ひんと人情をやうと云ふ言  
をかうりんたちやう多々、宋の王あると  
本ほ車のいもとす

諸侯の國の經訓ともあり、儒者にとひもく  
く、儒者に玉もんをもくちる学校と建て

て上身圓形より下、士庶人よりとぞ少へん  
しむ也。玉君やその事より古令流が盛衰のと  
考へ石抱の事よりわざうまくやうめぐらす  
こも次ハ傳入。次ハ今後とぞ少くも音續事の  
修業よりておへどもあらう。

要列あが城の法盡碑といふをう思察古人。  
據より不そよびのゆゑ書ふも一は盡といふ  
古の底とは不とうふ、碑は府の底ともゆく  
かりふとちう家事と考るよ盡よ底の事には

和儀のソヒラウタケル相壺利壺トリモ底する  
ソシテム。和儀ト片ト片ト片ハ辛比辛木の道  
那波た向う候恩深アキナの道と壺トリ。例  
有リと申奉の文引テ被ト片ト名志。ぬ  
神武と云ひテ唐代天皇と綱称ぢ坐りと半代  
主御と院と称。主御と天皇の称をまじに奉承  
申中安往と稱。安往と申の例。古例  
以テ御主と云ふ。うれようて主と称すと止み  
院と稱。凡事や小崩トテ。以來後の事と當

セタノ主の主は准へたるや和摩ともア  
古代を傳へりて十世の祖也

セテ御事の主とし和摩の名を却ゆ  
園梨尼院の産を幼时小食て之に御事  
又うしてかよみの書籍よりおもひふ予  
幼少の時因含すとて少く百字と御、才十  
六、案のひとて讀らるゝより學の窓  
むふえふ一よほくぬちとく少く而そがのつ  
に解せり骨へふとと幼少からい和モ

あまき傳するもあくび古賀のをとの性をうと  
のうへへるゝやう

綾小路东洞院寺入所神門の社を源三佐領政  
ノ第、宅の様子をうるゝ或云中のとての四源  
以本主と六角主に頼政の舊宅ありてそ  
れより室町殿花の湯原ハシヨシの所から  
さきたれりとひのうへ花の湯原ハシヨシの所から  
に有虎代のハ橋の宿、尊氏の軍の宿あり  
七月廿二日赤山の大文字の火、室町殿の所始

て三百余年からりぬまじけの毎年たるる

アーネスト半井の文集にあらかずだうは

あさて坐の事もみりてひそひよき奇觀と

いふ事

寛政食丑春六卯下人浦乾山家嘯山<sup>くわうさん</sup>を  
て岩倉小<sup>こ</sup>かく<sup>く</sup>と花<sup>はな</sup>えよまわし小<sup>こ</sup>美<sup>うつく</sup>里<sup>うり</sup>游<sup>ゆ</sup>  
藤原公蘿<sup>こうら</sup>磐<sup>いわ</sup>の代<sup>だい</sup>ならうといふとまひ祖<sup>そ</sup>房<sup>ぼう</sup>を碑<sup>ひ</sup>  
ちうき碑<sup>ひ</sup>をう上人<sup>じょうじん</sup>ときうて景<sup>けい</sup>ととも  
義<sup>ぎ</sup>房<sup>ぼう</sup>天馬<sup>てんま</sup>の神<sup>かみ</sup>とへとぞうりと奮<sup>ふん</sup>懶<sup>けら</sup>と冠<sup>くわん</sup>と

戻<sup>もど</sup>りし年<sup>と</sup>は國史<sup>こくし</sup>載<sup>さざ</sup>せりちやうへ<sup>へ</sup>後<sup>ご</sup>古<sup>く</sup>  
公<sup>こう</sup>房<sup>ぼう</sup>の在<sup>いた</sup>る處<sup>ところ</sup>御<sup>ご</sup>の文<sup>ふみ</sup>を續<sup>つづ</sup>け<sup>け</sup>考<sup>かう</sup>證<sup>じやう</sup>  
世<sup>せ</sup>住<sup>すむ</sup>職<sup>しょく</sup>とぞりぬ<sup>ぬ</sup>とこの御<sup>ご</sup>傳<sup>つた</sup>物<sup>もの</sup>の字<sup>こと</sup>をあらふ  
からむ居<sup>ゐ</sup>の人<sup>ひと</sup>として法<sup>ほ</sup>丈<sup>じやう</sup>の石<sup>いし</sup>とめしと送<sup>お</sup>相<sup>あ</sup>  
まと称<sup>いふ</sup>よ<sup>う</sup>かの碑<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>寛<sup>かん</sup>嘉<sup>か</sup>永<sup>えい</sup>伏<sup>ふ</sup>  
まと称<sup>いふ</sup>よ<sup>う</sup>かの碑<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>寛<sup>かん</sup>嘉<sup>か</sup>永<sup>えい</sup>伏<sup>ふ</sup>

予弱冠<sup>よわくかん</sup>の年<sup>と</sup>は東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>ちよひむくろ  
むくろか家<sup>いえ</sup>名<sup>な</sup>山水<sup>さんすい</sup>の姓<sup>せい</sup>小<sup>こ</sup>木<sup>き</sup>浦<sup>うら</sup>内<sup>うち</sup>の名<sup>な</sup>  
と蘭亭<sup>らんてい</sup>の號<sup>ごう</sup>と號<sup>ごう</sup>とあつまつよほ

ものととまうふねひ口ふけふやうてもうく  
ゆう／＼うち後東京を奔走する三十年とて  
て今の大とちりをうき天の年の年四月より  
書画の展覧あ／＼ひ端の仲三郎は常にそなえ  
ても會ふあ／＼ひのをかむらをある者  
をあそび於の／＼湯懶二生の紹介ふうてまふ  
うう／＼詔もえもよ、序もあ／＼て名刺ども  
もとと一時の感想をうながす

其人

赤松捨川 龍溪 告川清園 六如上人  
維則祿少 玄和田壽山 伴善漢 補本作故  
蘿壁之凱 佐木長秀 香龍翁 中山禪秀  
吉山萬翠 先ほの花ひと多山氏に字を永田氏の  
よむる各性名を知りぬりにまた外へ  
字名の士而識ちうの多し人ふとくほくほく  
よ弱冠のむ／＼かりのあ／＼とあ／＼鬼  
神とてもとくあ／＼ふ／＼とく又文堂是乃  
れひとをき／＼あ／＼ふ／＼とく又文堂是乃

すのふを膏の手とすを施し加護せられりふと  
ハシマリノ家汗

大内裏の時此園と云ふもくちあつてありれども  
今ふその方なまの御泉苑と云す前堂と  
御泉苑にさしてうつりぬをむの御泉苑方  
ハナアリ代天子御船の池なり今御舟もみて  
繞る一池なすニナニ圓臺ハトモくとて不ぞつ  
るきかやより後づもとて往くとての  
世事多くうかご人の毒考とはくはきなまら

シテ浪花の下町とソボの有寺と入に育み、和  
被乃今アリテ御もしままられておりりへけの  
築山もとの太いの岸をくわぐるか御座る  
人ふ向ひましりきの肩あえずの太いのじ  
今まるとさうもゆく行ひくすくさきるりる  
とさきて止ぬすが今もさう乃終かのうとも  
の青膏の性理のすと、又と無きとその趣だ  
予だくら朱文、名稱の地名と定めの  
を死もいとくもつむだひよ遠く寄りて又

希代乃改書と詔をひきもひいて人を引く

るはまことに今清胡もまきの我

圓すり生を車の我のむとソウ

白王侃<sup>ク</sup>論語疏の足利の学校よりも古文  
考證の家にうそ清別<sup>ク</sup>渡り知定<sup>シテ</sup>有<sup>リ</sup>書  
小のちて書のを度<sup>メ</sup>よ<sup>リ</sup>事一焉<sup>アリ</sup>とソウ<sup>ト</sup>  
三外<sup>ミツイ</sup>邦<sup>カント</sup>へも書<sup>メ</sup>よ<sup>リ</sup>出<sup>キ</sup>も<sup>リ</sup>  
蒙<sup>モウ</sup>永<sup>ヨウ</sup>行<sup>ハシメ</sup>ソ<sup>リ</sup>も<sup>チ</sup>う<sup>ス</sup>法<sup>ハ</sup>隆<sup>ム</sup>左<sup>タ</sup>  
傳<sup>ハシメ</sup>新<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>大<sup>ハシメ</sup>洞<sup>ハシメ</sup>裏<sup>ハシメ</sup>有<sup>リ</sup>しよ紀

たまうまくとまじめも施<sup>ス</sup>か<sup>リ</sup>先<sup>ハシメ</sup>引<sup>ク</sup>

ほ<sup>リ</sup>か<sup>リ</sup>康<sup>カニ</sup>穎<sup>カニ</sup>心<sup>カニ</sup>方<sup>カニ</sup>仁<sup>カニ</sup>の古<sup>カニ</sup>原<sup>カニ</sup>  
にう<sup>ス</sup>と寛政<sup>ハシメ</sup>年<sup>ハシメ</sup>征夷<sup>ハシメ</sup>府<sup>ハシメ</sup>よ<sup>リ</sup>こひなまし

やう<sup>ス</sup>河<sup>ハシメ</sup>よ<sup>リ</sup>く<sup>ス</sup>也<sup>ハシメ</sup>文<sup>ハシメ</sup>字<sup>ハシメ</sup>い<sup>ス</sup>よ<sup>リ</sup>み

仲村楊<sup>カニ</sup>翁<sup>カニ</sup>國<sup>カニ</sup>に<sup>ハシメ</sup>樂<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>耳<sup>ハシメ</sup>ふ<sup>リ</sup>と<sup>ハシメ</sup>  
隋<sup>カニ</sup>老<sup>カニ</sup>の裏<sup>ハシメ</sup>樂<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>判<sup>ハシメ</sup>り<sup>ハシメ</sup>ソ<sup>リ</sup>う<sup>ス</sup>れ

寶<sup>ハシメ</sup>唐<sup>ハシメ</sup>年<sup>ハシメ</sup>生<sup>ハシメ</sup>の象<sup>ハシメ</sup>銅<sup>ハシメ</sup>鉢<sup>ハシメ</sup>系<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>の原<sup>ハシメ</sup>  
源<sup>ハシメ</sup>小<sup>ハシメ</sup>來<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>東<sup>ハシメ</sup>那<sup>ハシメ</sup>の樂<sup>ハシメ</sup>ソ<sup>リ</sup>も<sup>チ</sup>弘<sup>ハシメ</sup>め<sup>リ</sup>銅<sup>ハシメ</sup>鉢<sup>ハシメ</sup>

氏先祖と以れと避々栗畠と名ふて來ぬたる事  
まことに之を字にいへりまと善きもうとい  
家小の彼と若て是とあつては後鉢鹿氏も  
少く心疾と云ひゆすれど先帝うぢに  
足らずするをう今しまへんがりて今うる草  
の盛りと云ふ歟一世明栗と云ひ鉢鹿氏内  
そ、魏氏、栗と云ひ魏性も心誠祥の傳くま  
栗院本清教もあひて云爾おなじふたれも  
禁まく人稀なり候處よ浦上玉造といひもの

うきと侍るのことを東魏準幸う栗うさん  
うかうか本家小侍り栗ともうかるある  
主教の彦を若きもの彼市をともに勧制  
も古雅うんうううううううううううう  
ほくうううううううううううううううう  
一年を派差して賛別九色の庵を東岩慶とうふ  
老医ノ西令ノ姓あるもの京谱の学小うう  
予小かうてふえあ氏うううううううううう  
敏うも二ぬの紋と立ちあつてうううううう

身の如くおうちさんよし、一あらすす病を  
死するゆゑこそ妻をもとめたりともいわゆる  
もゆりゆく今も遺恨をもてんやもえあ氏へう賛  
改名もやらざる外、禘より氏よりうゆの浦郡那  
宗喰浦とぞよも元末系の塙墟を、藤原氏哉  
長夜燒きあつて、ぢり思ひ少主の左まで  
桜尾氏と改むひち族のもの階えあと氏と維  
乾が京とまつて畠氏と畠家や小青山氏と畠  
家兄弟と死まりて、あれがわから知覺とく

えあ氏とつゝも家れども記徹かくと仰る  
旅さうとまづのいにえり、毫もてまの想之  
のあゆをあらそめてゆ



